

技術と生産

——ハイデガーからマルクスへ——

森 一 郎

はじめに

近頃の「西洋思想仲買業者」（以下「業者」と略）の流行の一つに、「何とか的転回」というネーミングがある。もちろん、この命名法のはしりは、カントのいわゆる「コペルニクスの転回」にあり、これは「対象ではなく認識が問題」という意味で、近代哲学における「認識論的転回」と評することもできようが、今世紀の哲学はさらに「意識ではなく言語が」という意味で「言語論的転回」を果たしたと言われることが多い。これに加えて最近では「解釈学的転回」とか「神学的転回」とかといったキャッチフレーズが業者の間では売れ線として有難がられているようであり、こうなると、とにかく「転回」と付ければ何かこれまでにない新しい発想が台頭しているかのように見えてくるから不思議である。だが、見かけはしょせん見かけであって、業者が営業セールスを維持するために性懲りもなく持ち出してくる流行商法など、賢明な消費者にはすぐ飽きられることであろう。

ところで、「転回」という言葉には一部の業者の間で長らくもう一つの用法があって、つまり「ハイデガー哲学における思索の転回」がしきりに問題とされた時期があった。だが今日では、「思索が転回する」という言い方は転用に過

ぎず「転回を思索する」こそ正式な用語法である、とするのが業者の一般的見解となっている。そういう営業上の議論はさておき、ハイデガー哲学の出現は、哲学的に見て、やはり何らかの「転回」を意味していると考えられることができる。それは、「言語論的転回」とはやや異なる「意識からの離反」つまり「意識ではなく存在が問題」という方向性である。「意識の志向性」(フッサール)から「世界内存在」へ、という現象学のこうした方向転換を、「ハイデガーの存在論的転回」と呼ぶこともあながちできない話ではない。(「意識への還帰」を原点とするフッサール哲学は、かの悪名高きプラトン主義やデカルト主義とともに、複数の「転回」にとって恰好の「踏み台」にされている。これらの「転回」後に現われるフッサール批判は、時流に乗った見栄えのいい売り物として業者の喜ぶところとなる。)

もちろん私はここで、ハイデガー関連業者の一人として「存在論的転回」を言祝ぐつもりは毛頭ない。そうではなく、もしかすると、この「転回」は、ずっと以前に敢行されたより大規模な「転回」の変奏に過ぎないのではないか、と思うのである。再演された大逆転劇が諷刺コントじみて見えるのは避けられない。少なくとも、つられて踊らされるほどのことはないだろう。では、ハイデガーがその軌道の上を動いていた哲学史上の「転回」とは。私たちは、「意識ではなく存在が」という言葉に見覚えはないか。

この物言いを知らない業者はもぐりであろう。史的唯物論を定式化した有名な『経済学批判』序文において、「人間の意識が人間の存在を決定するのではなく、逆に、人間の社会的な存在が人間の意識を決定する」と述べたのは、言うまでもなく、一八五九年のマルクスその人であった。彼の直接の「踏み台」は、頭で立って(顛倒)しているヘーゲルであったが、この「ヘーゲルからマルクスへ」あるいは「観念論から唯物論へ」という「逆転」によって、今世紀の「存在論的転回」はとくに準備され終えていた、と言ってよいのかもしれない。ハイデガーの形而上学批判とは、マルクスのイデオロギー批判の焼き直しだったのではないか。

だが、こんなことを言い出すと、たちまち業者から「営業違反」を咎められることだろう。「ハイデガーがマルクスに似ているだって。そんなナイーヴきわまりない重ね合わせこそ恥ずべき似而非比較研究ではないか」——たしかに、ハイデガーの「存在への問い」はマルクスの「経済学批判」とは共有する何物も持たないかに見える。あるいは次のように窘められるかもしれない。「かりに百歩譲ってマルクスとハイデガーに共通点があるとしても、そもそも、マルクス主義と実存主義という今世紀の二大思潮が仲良く没落した現在、この両者の接点を求めるかの如き古色蒼然とした作業を今さら掲げることには何の意味があるというのか」——こうした疑義はけだし正当と言うべきであろう。

それゆえ、私が以下で行なう「比較研究」は、まずもって次の二つの要求を満たすものでなければならぬ。第一に、ハイデガーとマルクスとを接近させ、そこに同一の「思索の事柄」を見届けることにより、両哲学者に関する研究の停滞状況に一石を投ずること。第二に、マルクス主義と実存主義がすっかり色褪せた今日において、なお哲学のアクチュアリティがあるとすればどのようなものか、を今、こつつまり「現代のロードス」において示すこと。この二つの課題に沿うべく、「思索の事柄かつ現代のロードス」として以下において選ばれるのが、本論の標題である「技術と生産」というテーマに他ならない。

一 技術への問い

ハイデガーという人は、あくまで存在への問いに、そして古代ギリシアにこだわるその態度からして、手の付けられないほどゴリゴリの保守主義者であるかに見えて、じっさいには決してそうではない。それどころか、時代におそろしく敏感な人であった。彼の初期の仕事は、歴史的に位置づけるなら、第一次世界大戦のもたらした混乱状況のなかから生じた「実存」という同時代的な問題意識を、哲学的に洗練させることにあったと言ってよい。だからこそ、

ヤスパースを凌いで実存主義の理論的支柱ともなったのである。この目利きのよさが逆に災いしてナチス関与という苦い経験を味わうことになるが、その後の沈潜期を経て第二次世界大戦後に再登場したとき、彼が最も積極的に打ち出したテーマの一つは「技術」という問題であった。つまりハイデガーは、近年「テクノロジー論」としてますます脚光を浴びつつある領域の有力な先駆者の一人なのである。

もちろん、哲学者が時代に敏感なのは、それが時代への迎合でない限り、少しも責められるべきことではないのだが、実存を論じていたハイデガーが一転して技術を論じるようになったことに対しては、いささか無節操ではないかとの印象を持たれる向きがあるかもしれない。だが、それは誤解というものである。前期において、実存分析が存在一般への問いの具体的な準備として提起されたのと同じく、後期における技術への問いとは、ハイデガーの存在論の根幹にかかわる一貫した問題意識が——それなりの紆余曲折を経て——開花したものである。どうしてそう言えるのか、まずこの点を明らかにしておく必要がある。

ハイデガーにとって「技術」という問題が、前期以来の重要なテーマであったことを瞥見するには、『存在と時間⁽²⁾』において、古代ギリシア以来の存在概念がどのように見とられていたか、を考えてみるだけで差し当たりは十分であろう。トルソーとなったこの書は、存在一般の意味を開陳するはずの結論部を欠くが、著者がある特定の存在概念を決定的に重視していることは、すでに序論の第六節において暗示されている。「何かを作り出されている、という最も広い意味での被造性は、古代の存在概念の本質的な構造契機の一つである」(SZ. 24)。この「作り出されていること(Hergestelltheit)」こそは、古代ギリシア人の一定の「経験」の上に成立し、その後も、中世においては神による世界の「被造性」として定着し、近代哲学の幕開けとされるデカルトの実体論の隠された先入見ともなり、今日に至るまで不断に西洋形而上学を徹底して支配し続けてきた、最も核心的な存在了解である——これが、「存在論の歴史の解体

という課題」(第六節標題)にかんする当時のハイデガーの根本確信であった。しかも、「存在者の存在の古代的な解釈は、〈世界〉または最も広い意味での〈自然〉に定位しており、この解釈はじっさい、存在の了解内容を〈時間〉から獲得している」とされ、けっきょくそれは、「現在という特定の時間様態を顧慮して了解されている」ところの「現前性(Anwesenheit)」という「存在論的・存在時的」な規定に他ならない、と言われるのである(SZ. 25)。「存在は時間に基づいて了解される」というこの見通しが、『存在と時間』という書物の骨格そのものをなしていることは明らかであろう。つまり、「存在＝恒常的現存性」(SZ. 96)という伝統的存在概念を、ギリシアにおいてそれが成立したところの「根源的な経験」(SZ. 22)に遡って「解体すること」、これが『存在と時間』の存在論的企図のすべてであった、とさえ言えるのである。そして、そのさい導きの糸となるべきは、「作り出されていること」と相関的な活動、つまり「作り出すこと・生産(Herstellen, poiesis)」であった。

しかも、こうした着眼は決して奇異なものではなく、むしろ伝統に深く根ざした見方であった。じっさい、初期ハイデガーの存在論構想に多大な示唆を与えたとされる『ニコマコス倫理学』におけるアリストテレスの模範的な定式化に従えば、人間の生ないし活動(energeia)には、次の三つの基本形態があり、しかもそれらは、知らないし真理の三通りの実存可能性(hexis)にそれぞれ対応している。つまり、「理性(nous)」の実現たる「観想(theoria)」、「賢慮(phronesis)」に導かれる「実践(praxis)」、「技術(tekhnē)」に基づく「生産(poiesis)」、⁽³⁾がそれである。つまり、ハイデガーは、このうちの三番目の「生産」という活動の次元こそが、古代ギリシア人が「存在(ousia)」を捉える上での基礎的な経験という役割を果たしたのだ、と言っているわけである。おそらく、書き継がれなかった『存在と時間』後半部は、「生産」に定位した伝統的存在論との徹底的対決が目指されるべきであったに違いない。そしてそのさいには、「生産」活動と一体となった知の在り方、つまり「技術」が、その真理性格にかんして、十全に限界づけられるこ

とになったことだろう。もちろん、この本論はついに書かれることがなかったし、『存在と時間』の問題設定そのものもけっきょく放棄されるに至った。だが、「技術と生産」にまつわる初期の問題意識を、ハイデガーは後期においてやや別な形で実現することになる。それが、後期の代表的論文「技術への問い」⁽⁴⁾に他ならない(中期における代表作「芸術作品の根源」もこの流れに位置づけられることに注意せよ)。

そういうわけで、ハイデガーは一貫して「技術」に対して際立った問題関心を保持していたのである。以下では、当面の課題にとって必要な限りにおいてのみ、この「技術への問い」の論述を追うことにしよう。

ハイデガーは、まず、「技術とは何か」に関する一般的な見解を叩き台として取り上げる(VA.9ff.)。それは、(1)「技術とは目的のための手段である」、(2)「技術とは人間の行為である」という二点にまとめられる。これらは互いに連関し合っており、「道具的かつ人間学的な技術規定」と呼ぶことができるが、ハイデガーは、常識的で「正当(trichtig)」でもあるこうした観念を徐々に顛倒していく。そのために、まず、「目的—手段」のうちにひそむ「原因」の観念が、伝統的な四原因説の解釈を通じて、ギリシア語の *'aition'* に遡って再考される(VA.11ff.)。この語をハイデガーは「そのせいである(Verschulden)」と訳し、かつそれを、「或るものを現前することへと出来せしめる」という意味での「きっかけとなる(Veranlassen)」とも言い換える。ところが、「きっかけとなる」とは、広い意味での「産み出すこと(poiesis, hervorbringen)」に属するが、この「ポイエーシス」の概念には、自然すら、いや自然こそ、「自己自身を産み出す」という意味で、最高度に含まれるのであって、けっきょくのところで、「ポイエーシス」とは、「隠れているさまから隠れなきさまへと産み出すこと」であり、「顕現させること(Entbergen)」としての「隠れなき・真理(alētheia, Unverborgenheit)」の様式の一つである、とされることになる。つまり、「生産」とは、古代においては「真理」の在り方に他ならなかった、というわけである。

以上の語義説明は、要するに「生産」のギリシアの意味の確認であるが、引き続きハイデガーは、「技術」のギリシア的理解を瞥見している(VA. 16f.)。「技術(Technik)」の語源である *tekne* というギリシア語に関して注意すべきは、それが、(1)手仕事の行為や能力だけでなく、高度の技芸や芸術をも表わしていたこと、つまり、上述の広義の「ポイエーシス」つまり「産み出すこと」に属するということ、および、(2)プラトンまでは、「エピステーメー」と同様、最広義の「認識」を表わす語であったこと、そして、アリストテレスがそれを「真たらしめるはたらき(*alathenein*)」の観点から初めてエピステーメーから区別したということ、である(これが、さきにふれた『ニコマコス倫理学』での議論なのだが、ここではテクネーが認識や真理という観点から位置づけられていることが積極的に受け止められており、テクネーに基づく存在了解を「解体」しようとした前期とは強調点が相当異なっている点を見逃すべきではない)。ともかく、「技術」とは、その根源においては、単なる手段ではなく、「顕現させること」という意味での「真理」の様式の一つであった、とハイデガーは言いたいわけである。「テクネーとはアレーテウエインの在り方の一つである」(VA. 17)——これが「技術への問い」の出発点となる基本テーゼなのである。

だが、そのような好事家的な語源穿鑿が、高度に発展を遂げた「現代技術」を考える上で何の役に立つのか、というもっともな疑問が起こってこよう。現代技術は、近代の精密自然科学に依拠することで、全く変質してしまっただけで、近代科学も、実験科学として、技術的器具や器具製造業に依存するようになっていく。当然のことながらハイデガーも、技術と科学のこうした「相互反映関係」に基づき、いわゆるテクノロジーの成立を重視することのような異論が出ることを認めている(VA. 17f.)。だが、問題は、そのような性格を帯びるに至った「現代技術の本質とはいかなるものか」である。「現代技術とは何か。それもまた顕現させることなのである」。このようにハイデガーは、あくまで「真理」という現象に定位して「現代技術に特有の新しい性格」を明らかにしようとする(VA. 18)。つまり、現代

技術を新種の、だがやはり「顕現させること」の一様式として一貫して解釈してみせるのである。そして、この議論が「技術への問い」の核心部分をなすのである。先回りして言うておけば、この分析は三つの観点からなされることになるが、それらは現象学の基本的語彙を用いれば、(1)「志向するはたらき(作用)」、(2)「志向されるもの(対象)」、(3)「志向するもの(主体)」というふうに整理できる。もちろん「志向性」という言葉は見られないが、分析のスタイルは意外なほど「現象学的」である。

まず、現代技術を支配している「顕現させること」とは、ポイエーシスという意味での「産み出すこと」ではなく、「挑発する」(Herausfordern)——この語は「そそのかす・けしかける」とも訳せる——である(VA. 18f.)。この〈作用〉によって、自然はエネルギーを供給するよう無理強いされ、その結果、エネルギーはほとんど採掘され貯蔵されうるようになる。石炭採掘、食物製造、原子力、水力発電、みな然りである。「現代技術をつかさどる顕現させることとは、挑発という意味での立てること(Stellen)という性格を持っている」(VA. 20)。しかも、これによって自然の隠されたエネルギーは、開発、変形、貯蔵、配分、変換される。挑発のこの一連の過程の根本動向は「操縦化」と「確実化」である。——これが、「挑発すること」という一語でしめくられる、現代技術の「顕現させること」の〈作用〉性格、つまり〈どうするか?〉の面である。

この「挑発」という語でもって言い当てられようとしているのは一体いかなる事態であるのか、という問題はあとで考えることにして、ひとまず、ハイデガーの説明をさらに追うことにしよう。

「挑発」によって駆り立てられたものは「用立てること(Bestellen)」に供される。用立てられるものは、もはや「対象(Gegenstand)」でさえない。ハイデガーはこれをとくに「用象(Bestand)」——この語は、辞書的には「手持ち・現在高・在庫品・備蓄資源」という意味である⁽⁵⁾——と呼ぶ(VA. 20f.)。これは、「顕現させること」としての現代技術の

〈対象〉性格、つまり〈何を?〉の面である。

ところで、〈何を?〉〈どうするか?〉とともに問われるべきは〈誰が?〉、すなわち現代技術の〈主体〉である。「用象」を「挑発」しているのは一体何者なのか。これに対する答えは自明であるかに見える。「人間」が、と答えればよさそうである。だが、この答えは決して十分ではない。なぜなら、人間自身もまた、自然エネルギーを採掘するよう「挑発」されているのだから。それどころか、人間こそ自然よりもいっそう根源的に「用象」に帰属しているとすら言える。たとえば森番は、木材加工業の「人的資源」になってしまっている、というふうには。総じて、人間は、技術を駆使することにおいて、用象の挑発に関与してはいるが、この用象の挑発そのものは、人間が作ったもの(Gemachte)では決してなく、人間の意のままにならないものである(VA. 21f.)。ここに至って、先の「道具的人間学的な技術規定」の限界が完全にあらわになる。だが、だとすると、挑発という仕方を用象を顕現させている現代技術の〈主体〉とは誰なのか。現代技術の本質を問うハイデガーの試みはここにきわまると言ってもよい。

「かの挑発することは、人間を用立てることへと集める(versammeln)。そのように集めることは、人間を、現実的なものを用象として用立てること、へと集中させる(konzentrieren)」(VA. 23)。現代技術を際立たせているのは、一切を駆り集めるこうした「集中体制」ないし「総動員体制」とも言うべき事態に他ならない。かくして、ハイデガーは、「山々(Berge)」の連なりが「山並み・山脈(Gebirge)」と呼ばれる造語法にならって、ありとあらゆるものを用象として用立てることへと人間を集める、かの挑発的要求のことを、「集立(Ge-stell)」——このドイツ語は「台架・骨組」といったほどの意味である——と名付けるのである(VA. 23)。現代技術の〈主体〉とは、人間と自然を呑み込んで膨れ上がる巨大な「集中体制」である、というわけである。

「技術への問い」の論述はこれでようやく前半というところなのだが、当面の問題関心からすれば、ここまで議論を

辿るだけで十分であろう。それよりも、ハイデガーが何を言わんとしているのかを考えてみなければならぬ。もしそれが単なる言葉遊びでないとするなら、「挑発」、「用象」、そして「集立」とは、一体何を意味するのか。個々人を超えて社会全体に圧倒的な支配をふるう非人称の何ものか、人間と自然を駆り出し巻き込み組み入れては肥大化してゆく世界規模の巨大な運動、人類と地球の全体から収奪され集積され自己増殖を遂げてゆく脅威的な力、それは果たして何であろうか。

二 集立と資本

もう一度確認しよう。ハイデガーによれば、現代技術は、かつてのポイエーシスのように「ひと・が・もの・をつくる」ではなく、「集立・が・用象・を・挑発する」というふうに変質してしまった、という。この事態は何を意味しているだろうか。

ここで、一見迂遠のようだが、全集七九巻として最近公刊された一九四九年のブレーメン連続講演『存在するものへの観入』を参照してみよう。その第二講演「集立(Ge-Stell)」では、一九五三年の「技術への問い」とよく似た論旨が展開され、しかもいっそう詳しく「集立」について論じられているからである。⁽⁶⁾

「集立(Ge-Stell)」とは、要するに「立てること」の集合体であるが、この「立てること」の含意は次のように説明されている。「立てる(Stellen)とは、挑発する、徴発する(anfordern)、出頭を強いる(zum Sichstellen zwingen)」という意味である。こうした立てることは、召集(Gestellung)として生ずる。召集命令において召集が人間に向けて発せられるのである」(G. 27)。この説明から、「集立」という着想が、戦時体制における有無を言わさぬ強制徴用、ヒトとモノの総動員体制とのアナロジーに由来していることが分かる。未曾有の殺戮の衝撃がまださめやらぬ大戦直

後、「召集」のニュアンスを伴う「集立」という語がいかにかまがましい響きを伝えていたか、は想像に難くない(それどころか、ナチス支配の時代には「集中(Konzentration)」とは「強制収容」のことを意味した)。だが、注意すべきは、戦争が終ろうとも「集立」という緊急体制は不断に続いている、とハイデガーが診断している点である。では、「平和技術」であるはずの現代技術に、非常事態の常態化ないしは日常化した臨戦体制がひそんでいる、とはどういうことか。

用象の用立て・挑発に関しては次のコメントがとくに示唆的である。「ひとは次のように言うだろう。大地が、そのうちに埋蔵している物資と動力に関して搾取されるのだ、しかるに、搾取(Ausbeutung)とは、人間の行為と営為なのだ、と」。「だとすれば、用立てることは、搾取という仕方で行された、人間の作為(Machenschaft)ということになる。[……]しかしながら、この外見は、単なる仮象にとどまる」(G. 29)。これは、「搾取・開発(Ausbeutung, Exploitation)」といった常套語のうちにひそむ人間中心的発想の限界を指摘したものと見ることが出来る。挑発する〈主体〉はもはや人間ではなく、人間を超えた「集立」なのだ、というわけである。この批判的発言をそのまま受けとる限り、ハイデガーは「搾取」という考え方に重きを置いていないように見える。だが、本当にそうであろうか。わざわざ断わっているということは、内容的にそれだけ近いということではないのか。そもそも「搾取」とはどういう意味であつただろうか。

言うまでもなく、「搾取」とは、マルクスの基本用語であつた。ここで「マルクスにおける〈搾取〉の概念」を主題的に論ずる用意はもとよりないが、ごく大雑把にこの言葉の意味を想起しておくことは決して無駄ではないだろう。^(こ) というのも、ハイデガーが理解したつもりでいた「人間の作為」といった程度の意味を大幅に超えた含蓄が、そこにはひそんでいるように思われるからである。それどころか、「集立」とは何を意味するか、という難問への糸口がそこ

に見出されないとも限らないからである。

‘Ausbeuten’ という語は、「収穫（物）・産出（高）」を意味する ‘Ausbeute’ の動詞形であり、自然から「獲物（Beute）」をなるべく多く採集・略奪する、というのが原義である。そこから、「（野を）耕す」「（鉱山を）採掘する」という意味に用いられ、さらには「開発する」とか「徹底的に利用し尽くす・食い物にする」とかいった含みを持つようになった。したがって、搾取される対象とは差し当たりは自然であり、いわゆる「天然資源」である。だが周知の通り、マルクスが「搾取」という言葉を用いる場合（たとえば「搾取度」）、第一次的に搾取されるものは、自然というよりはむしろ人間自身であり、いわば「人的資源」としての「労働者」である。つまり、マルクスの問題にしている「搾取」とは、自然を利用し尽くすように人間を駆り立て、その労働力を搾り取る、という際立った意味での「開発」なのである。

この「搾取」の概念が、ハイデガーの言う「挑発」に酷似しているのは今や明らかであろう。人間が自然を用立てることへと駆り立てられるという事態こそ、ハイデガーが「挑発」という語で最も強調しようとした点なのだから。もちろん自然全般（いわゆる「地球環境」）が収奪されるのだが、とりわけ自然の一部としての人間がまさしく「人材」として挑発・搾取されること、このことが決定的なのである。

だが、ハイデガーは「搾取」が人間の作為であるのに対して「挑発」とはもはや人間を超えたものである、と明言しているのではないか、と言われるかもしれない。なるほど先に確認したように、挑発の〈主体〉とは「集立」であって人間ではない、とするのがハイデガー技術論の基本的主張であった。では、マルクスの場合はどうであろうか。たしかに、マルクスには「資本家による労働者の搾取」という言い方も見られ、「搾取」の〈主体〉が、利潤追求を事とする「資本家」という人間であることは疑う余地がないかのように見える。「資本家 vs 労働者」という理解されやすい

階級闘争的図式が広く受け入れられてきたことも事実である。しかしながら、実を言えば、「搾取」の〈主体〉は、マルクスにあっても決して「人間」ではない。そうではなく、それはやはり人間を超えた何かなのである。自然と人間とを搾取しつつ自己増殖を遂げるこの〈主体〉、まさにそれをマルクスは「資本(Kapital)」と呼んだ。そして、近代にはびこるこの怪物の正体を解明した書こそ、彼の名著『資本論(Das Kapital)』に他ならない。

それゆえ、この書物の主旨からして、「資本」が〈主体〉もつと言えは〈主人〉なのであって、これに対して人間は、労働者であろうと資本家であろうと、「資本」の〈奴隷〉に過ぎない。自然の搾取へと駆り立てるといふ仕方では労働者を搾取しているのは差し当たり資本家であるとしても、そのような労働者の搾取へと駆り立てるといふ仕方では資本家をも搾取している真の〈主体〉とは、「資本」それ自体なのだから。(したがって、近代市民社会を形容する‘kapitalistisch」という用語は、まずもって「資本本位的」という強い意味で理解すべきであって「資本家的」と訳すのはいただけないし、「資本制的」とするよりは「資本主義的」と訳す方が適當なのである)。人間としての「資本家」が問題になるのも、彼が「人格化された資本」「資本の魂」である限りにおいてなのである。

私の言わんとするところはもはや明らかであろう。ハイデガーの「技術」論における「集立」とは、マルクスの「生産」論における「資本」と等価と言えるのである。「挑発」が「搾取」と意味的に重複するように、「集立」はまさしく「資本」の代替概念なのである。——この単純このうえない事実が孕んでいる複雑きわまりない意味を解きほぐすことが肝要である。

ここで、『資本論』においてマルクスが取り組んだそもそもの課題とは何であったか、を想起すべきだろう。「私がこの本のなかで研究しなければならないのは、資本主義的生産様式であり、それに対応する生産関係および交渉関係である」(K. 12)。初版序文のこの有名な一文から窺える通り、マルクスが立てたのは「資本主義的生産の本質とは何

か」という問いであった。これを敷衍すれば、「資本主義的でない生産諸様式があるなかで、近代市民社会に固有な資本主義的生産を特色づけているものは何か」というふうに言い換えられるだろう。ここでマルクスがあくまで話題にしているのは「生産(Produktion)」である。しかも人類に普遍的な生産一般つまりポイエーシスではなくて、近代に特有な生産の在り方が問題なのである。⁽⁸⁾これは、ハイデガーが、古代以来の技術一般つまりテクネーではなくて、現代に特有な技術の在り方を問おうとしたのと完全にパラレルではないだろうか。少なくとも、両者の議論が似通ってくるのは決して偶然ではないのである。

ところで、ハイデガーは、集立によって挑発されるのは「用象」となる、としていた。この「用象」とは何のことか、をマルクスに即して考えてみると、まことに答えは簡単なものとなる。「商品(Ware)」と答えればよさそうだからである。「資本主義的生産様式が支配している社会の富は、〈商品の巨大な集まり〉として現われ、個々の商品は、その富の要素形態として現われる。それゆえ、我々の探究は、商品の分析から始まる」(KGA)。言うまでもなく、『資本論』全巻は、冒頭における商品という存在者へのこうした着眼から開始される。だが、「商品」が「用象」に対応しているのは間違いないとしても、この等置にさほどのメリットはないようにも見える。マルクスの商品分析がどれほど実り豊かであるとしても、いやむしろそうであればあるほど、それをハイデガーの「用立て」の議論と対比させるのは余りに安直であるとのそしりを免れないであろうから。

しかし、先に確認したことだが、「搾取」にしろ「挑発」にしろ、その対象はありとあらゆる「資源としての自然」であるにせよ、わけでも重要なのは、自然の一部としての人間自身が搾取・挑発の対象になっているという点であった。それにしても、人間が「用象」となって「集立」に組み込まれてゆく、というのは、それほど分かりやすい主張とは言えないだろう。だが、人間自身がれっきとした「商品」となって「資本」に組み込まれてゆく、ということな

ら、これは大いにありうるのである。しかも、マルクスはこの「人間の商品化」つまり「労働力商品の売買」こそ、資本主義的生産様式を特色づける現象であると見なすのである。「資本の生産過程」を主題とする『資本論』第一巻の核心はここに存する。マルクスによれば、「資本が人間を労働力商品として搾取する」という事態こそ、資本主義的生産の本質なのである。「集立が人間を象として挑発する」というハイデガーの主張は、実質的にはこれを少しも超えるものではないように思われる。

じっさい、ハイデガーはお得意のヴォルトシュピールを駆使して「人間も、それなりの仕方だ Bestand と Stück という言葉の厳密な意味（つまり細分化でき一様均一であるがゆえに代替可能な構成要素・対象断片・歯車の一つであること）において、Bestand-stückである」と述べており（G. 37）、人間が全体の一員ではもはやなく孤立したアトムとして寄せ集められるに過ぎない「人間の対象化」について語っているが、いかんせんこうした記述だけでは、次のような疑問の生ずることは避けられないのである。つまり、自然としての人間が人的資源として「集中」させられるのは一体何のためか、人間は「人材」として何を供出させられているのであろうか、と。——この問いは、ハイデガーからマルクスへと差し戻した上で再吟味されるべき体のものである。

しかも、「対象としての人間」を「労働力商品」と読み換えることは、平行性の図式的な確認を意味するだけでなく、それによって、「集立」という不可解な現象についての、言い換えれば「現代技術の本質」についての、いっそう判然とした理解が得られるというメリットがあるように思われる。今や問題とすべきは、マルクスの「資本」概念そのものである。

三 時間のテクノロジー

ハイデガーの「集立」をマルクスの「資本」に形式的に重ね合わせるだけでは、問題がたんに後ろに一步ずらされたに過ぎないことは言うまでもない。そういう「資本」とは一体何か、という問いを改めて誘発するだけだからである。だが、幸か不幸か、マルクスはもう少し先を行っているように思われる。というのも、ハイデガーの「現代技術」論を理解するためには、散見される該当箇所から推察して「集立とは何か」と問わざるをえないが、これに対して、「資本とは何か」という問いこそは、マルクスの「近代生産」論をしめくくる統一テーマであり、彼の主著はあげてその解明に当てられているのだから。では、マルクスは「資本」をどのように捉え、近代における生産の本質をどこに見ているのだろうか。

マルクスの答えは至って明快である。資本主義的生産様式の本質はたんなる生産一般ではなく「資本の生産」にある、というのがその答えである。これは要するに、マルクスの「剰余価値説」と呼ばれる非常に有名な議論であるが、当面の連関に置いてみると、そこには豊かな鉾脈がいまだに「開発」されずに眠っていることに気が付く。そこで以下では、マルクスが「資本の生産」という形で浮き彫りにした、近代に特有な生産の意味をもう一度考えてみることにしたい。

一般に、現代の経済システムの本質は「商品の大量生産」にある、としばしば言われるが、これは資本主義の有力な特徴の一つではあっても、決してその本質ではない。資本主義下の生産の目的は、「ものをつくること」(ポイエーシス)にもなければ、「より多くものをつくること」(ポイエーシスの増強)にもない。そうではなく、その至上目的は、「ものをつくること」を手段として「もっけ(Ausbente)をふやすこと」つまり「利潤の増大」にある。その証拠

に、いくら商品を製造しても利潤が上がらなければ一切はムダになる。「同じことの繰り返し」に過ぎない「単純再生産」は、資本主義においては、端的に無意味なのである（「永遠回帰」の悪夢）。マルクスの用語をさらに使って説明すれば、唯一ここで問題なのは、「使用価値」としての商品を製造することではなく、商品にやどる「価値」をより多く産み出すこと、つまり「剰余価値の生産」なのである。前回より今回の方がプラスアルファとなり、それが次の一層のプラスアルファをもたらす、という累積的發展、そのプラスアルファ分こそ、「剰余価値」と呼ばれ「資本」の実体をなす当のものに他ならない。こうして次第に生ずる「余分・余裕」が繰り返し資本に合算され生産に再投入されることによって集積・倍加されどんどん資本が「自己増殖」してゆく（はずである）という事態、それが、「拡大再生産」による無意味さの救済（「歴史的進歩」の神話）なのである。ただしそのためには、救いはつねに先送りされねばならない。「いま我慢すれば、あとできっと報いが……」というわけである。

逆に言えば、「単純再生産」にしろ「拡大再生産」にしろ、「再生産」それ自体には全く意味はない、という点では同じなのである。そしてこのことは、どんなに生産力が「発展」しようとな変わらぬ。純然たるポイエーシスという意味では、人類は昔からえんえんと同じことを繰り返してきたに過ぎない。そして、これからも当然そうなのである。しからば、「再生産」以上のものを果たして人類は産み出しうるのだろうか。⁽⁹⁾——ここには、人をニヒリズムに駆り立てる何かがある。しかしながら、資本主義において人はこの問いを免除されるしくみになっている。なぜなら、先に見た通り、資本主義下では、真の〈主体〉は人間ではなく資本そのものなのだから。そういうわけで、剰余価値の付加による「資本の自己増殖」こそ、この奇妙な主人を戴く「集中体制」の究極目的なのである。総じて、マルクスの近代生産論によれば、資本主義的生産様式に本質的なのは、ただのポイエーシスではなく、「拡大再生産」による「剰余価値の生産」である。

さて、問題はこの「剰余価値の生産」がいかに行なわれるかである。手品めいたこの特異な「生産」についてマルクスは入念な議論を展開している（『資本論』第一巻はこの「資本の創世紀」に費やされている）が、ここでは、その大筋だけを押さえるだけにとどめよう。

たしかに、等価交換を本義とする商品流通の内部では、原則的に剰余価値は生じようがない。むしろ、その生成の謎は、他ならぬ資本主義的生産の内的構成要素のうちひそんでいる。つまり、商品生産過程においてその使用価値の消費が「価値」を産み出す唯一の「商品」であるところの「労働力商品」によって、初めて剰余価値は「生産」される。人間の言わば自然エネルギーの支出たる「労働時間」のうち、当人の生存のための必要労働時間を超えて「剰余労働(Mehrarbeit)」が行なわれるとき、その労働時間内に生産される商品の価値が「剰余価値」を形成するのである。そして、これこそは、あの「資本による労働力の搾取」と呼ばれる事態に他ならない。

このように、資本主義に本質的なことは、価値の玉手箱たる生産過程へとできる限り多くのものを送り込み「集中」させること、とりわけ人間を労働力商品として「召集」して駆り立てること、であり、かつ、この過程を何度も「回復」して肥え太らせ、それが「循環」するたびにどんどんと増殖させること、である。この点を押さえた上でハイデガーの「集立」の次のような説明を改めて読んでみると、それが「資本の自己増殖」という現象の形容として余りにピッタリなのに驚くほどである。

「集立は、用立て可能なものを、用立てることの循環過程(Kreisgang)のうちへと、不断に引きずり込む。〔……〕対象のうちへ留め置くこと(Abstellen)は、用立て的なもの(das Beständige)を、立てることの循環過程の外に出して立てるのではない。つまり、留め置くとは言っても、それはもっぱら、後続の用立て可能性に向けて次々と(weg und hin)であり、言い換えれば、用立てることのうちへと戻して(hinein und zurück)なのである」(G. 32)。「集立は

一切を用立て可能性へと一斉にむしりとる。それは、現前するものすべてを用立て可能性へとひたたくり、それゆえ、そうしたひたたくること(Raffen)の集まりなのである。集立とはつまりGeraffなのである」(G. 32)。「集立がそれ自身において集められつつ立てることは、それ自身において循環しつつ駆り立てるじつ(in sich kreisendes Treiben)の集まりである。集立とはGetriebeなのである」(G. 33)。要するに、「集立とは、それ自身において、用立てることから用立てることへと用立て可能なものをひたたくりつつ駆り立てる円環運動(die raffend treibende Zirkulation)なのである」(G. 33)。

言葉遊びが過ぎるように思えなくもないが(一九四九年の講演「集立」でのこうした表現は、一九五三年の「技術への問い」にはもはや見出されない)、ハイデガーが何とか説明したがっている事態は、『資本論』で主題化されている資本の運動諸様式、なかならず「蓄積・集中(Akkumulation)」と「流通・循環(Zirkulation)」に相当するのではないだろうか。少なくとも、ハイデガーの韜晦な「集立」概念を、マルクスが解明した「資本」の現象に透かして読み直すのは、決して無駄なことではないと思われる。今引用した箇所を引き続いて、機械の「回転(Rotation)」が問題にされ、しかも一八世紀末のイギリスにおける「動力機械」の発明——いわゆる「第一次産業革命」——への言及が見られる(G. 34)のも、何ら偶然ではないだろう。

それはともかく、「人間を労働力商品として搾取する資本」というマルクスの概念は一体何を意味しているのだろうか。私なりの解釈を示せばおおよそ次のようになる。

人間から搾取され資本に組み込まれるのは「剰余価値(Mehrwert)」であるが、それは要するに、生産活動における「余った時間・ゆとり」の所産である。この「剰余分(Mehr)」が使われることなくまさしく「留め置かれ(abstellen)」再び生産活動に振り向けられることによって拡大再生産が繰り返され、かくして資本は自己増殖を遂げてゆく。これ

が「資本の生産過程」であるとすれば、けっきょく資本とは「余った時間・ゆとり」によって産み出される、と言ってよいだろう。余った時間が「消耗 (verbrauchen)」されずに「節約 (ersparen)」され、いっそうの剰余分を産み出すべく再び生産活動に供出されること、ここに「資本の生産」の核心は存する。つまり、資本主義的生産様式は「時間の節約・経済 (Ökonomie der Zeit)⁽¹⁰⁾」から成り立っているのである。

資本にとっては「余った時間」が増えれば増えるほどよい。その剰余分をおのれのうちに取り込んでますます膨れ上がることができるからである。では、どのようにすればこの「隙間・余裕」は拡大しうるであろうか。それが「剰余価値の生産」の二つの様式としてマルクスによって主題化された「資本の狡智」とも言うべき方式に他ならない。つまり、「絶対的剰余価値の生産」と「相対的剰余価値の生産」とがそれである。

「絶対的剰余価値の生産」とは、直接的（もっと言えば露骨）な搾取の仕方であって、「労働日」の延長によって剰余労働時間の「絶対量」を拡大するという方法である。これは労働者にとっては、その分だけ自由時間が剝奪され「ゆとり」が痩せ細ることを意味するから、ここに労働時間をめぐる激烈な「労資闘争」が展開されることになる。

これに対して「相対的剰余価値の生産」とは、「生産力」の向上によって必要労働時間に対する剰余労働時間の比率を「相対的」に拡大するという方法である。つまり、時間当たりの生産効率を増やし、労働力活用の強度を高めるといふ、より巧妙な「資源開発」である。そして、ここに投入されるのがまさしく「生産技術」であり「テクノロジー」なのである。よく知られているように、マルクスは、資本主義にとって構成的な合理化・集約化の「技術—生産」形態として、「協業」「分業とマニュアル化」「機械制と大工業」の二つを挙げている。ここに、「時間のエコノミー」の中枢部をなす「時間のテクノロジー」⁽¹¹⁾が全面的に展開されることになる。しかも、「労働時間の短縮—余暇の増大」という予定調和を約束された円満な「労資協調」のもとに。そしてまた、労働力の価値そのものの低下という奇妙な

「代償作用」を内に蔵しながら。

さて、以上の考察から何が見えてきたであろうか。「テクネー問題」に関して現時点で得られた暫定的な結論を、備忘としてテーゼふうに掲げておくことにしよう。

唯物史観において「土台」をなすのは「生産力」であるが、それは実質的には、「生産技術」という形で「力となった知」のことである。それは、かつてポイエーシスと結び付いたテクネーと呼ばれ、原則的に「生活必要物の再生産」に繋縛された「奴隸的」な手段知に過ぎなかった。ところが、古代的な「徳は知なり」は、近世以降いつしか「知は力なり」へと逆転され、資本主義下では、効率化・省力化によって生産力を高める日進月歩の科学技術が、つまり「時間のテクノロジー」こそが、人類と地球を支配する最高の知恵となった。ハイデガーが、「集立」を西洋形而上学の末期症状にして完成形態と見なすとき、それは、以上のような「テクネーの成り上がりとしてのテクノロジーの支配」のことを指しているのではないだろうか。

だが、テクノロジー論としては、「生産—技術—力」の問題に真正面から取り組んだマルクスの方が先を行っているように思われる（近時のテクノロジー論者たちが、そろって、ハイデガーの技術論には言及してもマルクスの生産論には全く考慮を払わないのは何と滑稽なことだろう）。ただし、マルクスにはテクノロジー楽観論が濃厚であり、ただちにそれを受け入れることはできない。とはいえ、彼の「技術の目的」理解には、アリストテレス以来の健全な伝統がなお生きているように思われる。つまり、「技術は自由のために」という価値序列がそれである。「技術によって余裕が産み出されるのは市民の自由をはぐくむかぎりで望ましい」という古代人のまっとうな閑暇礼賛の姿勢が、マルクスの「テクノロジーによるユートピア」論にも垣間見られるとすれば、「芸術的創造性」というポイエーシスのもう

一つの面に「救い」を見出すハイデガーのヴィジョンとはまた異なった再読可能性を、やはりマルクスは秘めているように思われてならないのである。

【注】

- (1) K. Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, in: *Marx-Engels Werke*, Bd. 13, S. 9.
- (2) M. Heidegger, *Sein und Zeit*, 15. Aufl., 1979.——以下、SZと略記。
- (3) 『ニコマコス倫理学』におけるアリストテレスの真理論に対するハイデガー独自の読み方、およびその問題点に関しては、拙論「哲学の実存」(哲学会編『現代における哲学の意味』、哲学雑誌第一一〇第七八二号、一九九五年一〇月、所収)を参照。
- (4) M. Heidegger, *Die Frage nach der Technik*, in: *Vorträge und Aufsätze*, 5. Aufl., 1985.——以下、VAと略記。なお、ハイデガーにおける「テクネー問題」に関しては、三上真司「ハイデガーのテクネー論(Ⅰ)」(横浜市立大学紀要、人文科学系列第二号、一九九五年、所収)、および「自然と作為——ハイデガーの存在史理解のための補註——」(横浜市立大学論叢、人文科学系列第四六卷一、二、三合併号、一九九六年、所収)を参照。
- (5) この‘Bestand’という語は、ハイデガーも認めているように(VA, 20)‘ドイツ語としては‘Vorrat’ という語とほぼ同義であり、英語で言えば「ストック(stock)」に当たる。議論を先取りすることになるが、ここで、マルクスも指摘していること、つまり「英語のストックが資本と同義語である」という事実、を確認しておくことは決して無駄ではないだろう。Vgl. K. Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, Dietz Verlag, S. 199, Anm. 9. (以下、本書をK.と略記)——ちなみに、そのちがひマルクスはドイツ語の‘Stock’つまり「棒」の含意を仄めかしている。ハイデガーに負けず言葉遊びが好きというべきか。
- (6) M. Heidegger, *Das Ge-Stell*, 2. Vortrag von *Einblick in das was ist*, *Bremer Vorträge 1949*, in: *Gesamtausgabe*, Bd. 79, 1994.——以下、G.と略記。
- (7) 「搾取」の語義に関しては、内田義彦『資本論の世界』、岩波新書、一九六六年、一六頁以下の啓蒙的解説を参照。
- (8) マルクスの区別立てを用いるなら、ポイエーシスに相当するのは、「人間生活の永遠の自然的条件であり、どのような生活

形態にも独立しており、むしろすべての社会形態に等しく共通である」(K. 198)とされる「労働過程」であり、これに対して、資本主義生産を際立たせる特徴とは「価値増殖過程」である、ということになる。

- (9) この問いにニーチェは当面せざるをえなかったし、それはまた古代の哲学者たちの問題でもあった。そして言うまでもなく、これらの人々の答えはすべて「否」であった。本文中に示唆しておいたように、ニーチェの永遠回帰思想とは、歴史的進歩という近代的観念に対して最終的に「否」を言う試みだと理解することができる。この問題に関しては近いうちに詳論する機会を持ちたいと思う。なお、進歩史観に対するニーチェの態度に関しては、三富明『永劫回帰思想と啓蒙の弁証法』、理想社、一九九五年、を参照。

- (10) Vgl. K. Marx, *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie 1857-1858*, Dietz Verlag, S. 89.

- (11) 「時間のテクノロジー」という用語は、前注で示した出典箇所を持つ「時間のエコノミー」という言葉とは異なり、マルクスに由来しない私の造語である。たんなる比較研究を大幅に超える巨大な問題群を表示すべきこの概念についての本格的な論究は、稿を改めて試みなければならぬだろう。

付記： 本稿は、一九九五年度文部省科学研究費補助金（奨励研究A）に基づく研究成果の一部である。ただし、大学における学術研究にとって「研究成果」など本来はいつでもよいことは、言うまでもない。